檀一雄

火宅の人

下

新潮文庫

火宅の人(下)

新潮文庫　　た－5－4

昭和五十六年七月二十五日　発行
昭和六十一年一月三十日　十一刷

著者　檀一雄
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六－五一一一
編集部(〇三)二六六－五四四〇
振替　東京四－八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊥　印刷・大日本印刷株式会社　製本・加藤製本株式会社
© Yosoko Dan 1981 Pninted in Japan

ISBN4-10-106404-0 C0193

新潮文庫

火宅の人

下巻

檀一雄著

新潮社版

2748

火宅の人

下卷

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

寂光

ロンドンには夜着いた。飛行機のタラップを踏み降りてみると、西も東もわからないような深い霧である。その霧の中に、まるで光を吸いとられてしまったような電燈が、かろうじて息づいているように見えた。

ニューヨークを出発したのは、朝の八時である。ジェット機で六時間半の行程だと聞いていたから、ロンドン到着は、まだ日の高い二時か三時頃のつもりでいた。二時か三時なら、行きあたりばったり、どうにでもなると多寡をくくっていたのに、一寸先も見えない夜霧のロンドンの中に抛りだされて、私は菅野もと子をふりかえりながら、一瞬、途方にくれた。

「どうする？」

「どうするって、やっぱり電報を打っておけばよかったな。そうしたら、誰か迎えに来てくれたのに……」

そうはいかない。駈落風情の密行に、人並の出迎えなぞ受けられる道理がないではないか。それでも、私達は腕を組んで、濃霧の中をターミナルの所まで歩いて行くと、同じ飛行機に搭乗していたK・K女史が、その出入口のあたりで、花束を手にしながら、華やかな出迎えを受けていた。

「あら、桂さん。あなたたちはどうなさるの？」

目ざとく、そのK・K女史から呼びとめられた。
「どうもこうもありませんよ。昼のつもりで降りてみたら、夜でしょう。おまけにこの霧です。まるで、ジェット機からたぶらかされたようなもんだ」
「アハハ、時差ですよ。ジェットに乗ると、きっと初めはだまされます」
K・K女史の出迎えの人から教えられた。
「だって、桂さんったら、始めから終りまで、酔って眠ってらしたんですもの、何時に着くんだか、どこへ連れていかれるんだかだって、きっとおわかりにならない筈よ」
そのK・K女史の周りに、またひとしきり、哄笑が湧いた。私はその場を早く逃げだしたいが、K・K女史は一々私を出迎えの人々に紹介して、
「宿はどこになさる？」
「そんなアテがあるもんですか」
「あら、あきれた。ロンドンはちゃんと予約しといたって、桂さんのようないかがわしい方なんか、泊めないとこよ」
「それなら、公園のベンチ。いいだろう、菅野さん」
私もようやく殺伐な勇猛心が湧いて、傍らの菅野もと子をかえりみると、
「ええ。すてきだわ」
「そんなこと、おっしゃらないで、ひとまず私の宿までいらっしゃいな。あちらで交渉してもらいましょうよ」
K・K女史のおだやかな解決策を聞きながら、今しがた、私たちを吐きだしたボーイング707

の巨大な機体が、みるみる濃霧に襲いかかられて身悶えているような、凄まじいロンドンの霧の景観を眺めやっているのである。

「そうなさいませよ。車も三人だったら、なんとか乗りこめるでしょう？」

「ええ、大丈夫です」

K・K女史の出迎えの人は、もうさっさと、自動車の置き場のあたりに私たちを案内する気配である。私は観念した。いや、自分さえ、ぶざまに投げだしてしまえば、こんな愉快な成行はないだろう。

自動車はロンドンの霧に吸いよせられるようになりながら、ヘッド・ライトの前方、わずか数メートルの鋪装の色をたよりに、ノロノロと匍匐して行くのである。道路の真上には、真ッ黄色な濃霧用の吊電燈がさげられていて、次々と霧ににじむ、そのあやしい黄色の燈火に、私達の車が辛うじてたぐりとられてゆく有様だ。時折、耳馴れない霧笛の声が、その霧のどこかの果てで、聞えている。その哀れな黄色ランプの上も下も、左も右も、僅かに数メートルの視野を残して、スッポリと際限のない奈落であり、その奈落の霧が、黄色燈のにじむだけの、狭い空間の汀に、ヒタヒタと寄せているように思われた。私はフッと、故もなく、文目も知れぬ私自身の生涯の行旅を、その霧の中にまざまざと実感して、不思議な戦慄を感じはじめている。

それでも、自動車はようやく市中に辿りついたらしく、やがてホテル・W……の前に横附けになり、私たちは、まぶしいホテルのロビーにはいりこんでいった。もちろんのこと、K・K女史の部屋は前以てとってある。K・K女史は急にあらたまったように、

「桂さんたちも、ここでいいんでしょう？」

「とれさえすれば、ここで結構ですけど」
「だったら、交渉させてみますわ」
出迎えの人は、私の旅券と菅野もと子の旅券をもらいうけて、フロントの折衝に出かけて行ってくれたが、やがて引返してくると、
「一部屋だけは、とれるそうですけど……」
「ああ、一部屋で結構です」
その出迎えの青年は、私たちの旅券を重ね持ったまま、不思議そうに、K・K女史と、私と、もと子を見くらべるようにしていたが、
「じゃ、きめてまいります」
私もようやくホッと胸をなでおろす心地である。私は出迎えの青年がかえってくると、急にこのロンドンの町の中で、報復的な大酒盛がしたくなって、
「どうもいろいろとすみませんでした。K子さん、皆で一緒にロンドン到着第一夜の酒盛をやりませんか。腹もへってきたし、シナ料理か何か、そんなとこはありませんか？　お酒の飲める……」
「ウフフ、おごって下さるの？」
私たちは手荷物をことごとくフロントに預けたまま、そのホテルからタクシーで繰り出した。遠くもない霧の町角に、金城飯店とかいう中華料理屋があって、その階上に上りこみ、どうやらこの夜霧の大都市を睥睨（へいげい）するような思い入れだ。私はうろおぼえの中華料理の名を、口から出まかせ、しゃべったり、書いたり、取消したり、忙しくウイスキーの乾杯になった。ロンドンの

酒場という酒場は、正十一時にはっきりと店を閉じるらしく、「その前に飲み終らないと追い出されます」K・K女史の出迎えの青年が、なんとなくロンドン防衛の口吻になったのは、ひょっとしたら、私の日頃の悪業が、それとなく察知されたその反感によるのかもわからない。

しかし、もと子も、K・K女史も、面白おかしく酔っていった。ニューヨークに比較して店の煖房がきかないせいもあったろう。ロンドンの霧の鬱陶しさもあったろう。私たちはみんな、身体と身体をくっつけあうようにして、あやしい中華料理を突つきながら、ウイスキーを飲んだ。

ホテルに帰りついた時には、K・K女史も、もと子も、少しよろけ足であったかもわからない。私は彼女たちの腕を、両の腕にしっかりと支えてホテルの玄関をくぐったが、そのフロントで、私たちの部屋の鍵を受取ろうとして、ひと悶着になった。

しばらくの間、私は先方の云い分がわからなかった。部屋は二つ用意してある……。勿論、それで結構だ……。しかし、三人では泊れない、と先方が云っているらしい。部屋が狭いのか？私がいぶかると、御婦人方が二人で泊るとは聞いていない、御婦人の部屋は一人部屋だ、とフロントが云っている。

「ええ、私は一人で結構です」

とK・K女史がうなずいた。

「じゃ、私の部屋が狭いのか？」

いや、ツインベッドだ、と答えているようだ。じゃ、問題はない筈だ、とそう思っていると、さっきの旅券を見せてくれ、とフロントが菅野もと子にむかって慇懃な言葉になった。もと子が旅券を差出すと、やっぱり三人はお泊めできません……、もと子の旅券をパチンと閉じながら、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

フロントの男はまた慇懃に、その旅券を菅野もと子に返すのである。
私たちはようやくその理由に気がついた。K・K女史がすばやく、
「そうそう、私たち二人が一緒に泊るのなら、泊めてくれるんでしょう？　そのツインの部屋に？」
そう云いながらもと子の肩に手をかけたから、先方は大仰にうなずいて、たちまち相好を崩し、宿泊の紙片を差出した。
金ボタンのボーイが二人、それぞれの鍵と手荷物を抱えこんで、彼女たちを四階に、私を五階に、水もとまらぬような早さばきで区分けしていったから、私は呆然と自分の部屋に坐りこんだ。
窓際のカーテンをこっそりと繰って、一寸先も見えないようなロンドンの霧に、しばらくじっと見入っている。電話をかけてみようかとも思ったが、今更、入れ替ることは難しいだろう。部屋の番号は覚えておいたから、何ならあとから状況偵察に行けばいい。私は鞄の中から、手持のウイスキーを取りだして、あたりに犇き集っている霧を、百万の敵の軍勢のように見据えながら、一人黙って飲んでいる。
すると、どう表現しようもないような、奇怪な想念が、あとあとと、周りの霧と一緒になって、私に襲いよってくる感じである。人間なにものかという、みじめな感慨だ。たとえば、私が、唯今、霧のロンドンの一角にもっともらしく坐っているといったって、そもそも、それがいったい何だろう。古人の譬えではないが、大海中の盲亀が、波に翻弄され翻弄され続けながら、一片の浮木を探し求めているようなものではないか。幸福とか、愛とか、真実とか、そんな紛わしいものの棲息しうるような、なまぬるい環境も、時間もなさそうだ。むかし男ありけり、たまたま、

行きずりの道で、童女に逢い、その童女と結ばれて、ともに抱き、ともに泣き、ともに喜び、さて、玉のような子供を生み、その子がまた行きずりの道で、いとしい童女にでもめぐり逢うわけのものだろうか。そうして、ほんとうに愛しあったと囁きあいながら、この生を終ったならば、それが天意に叶った人間の幸福と、愛と、真実を告げる出来事なのだろうか。私たちは、目前刻下、生きているということは、確実のようだ。まことに気紛れな、偶然の過失の集積としてだ。もし、その中に何ものかが実現されているとするならば、それは私たちを生みだしてゆく……、存続させてゆく……、或いは存続させてゆこうとする……、不思議な、酷薄な、生産する自然力の意思とでもいったものだろう。そこに、巨大な神を見たって、いっこうに差支えはない。ただ、盛者も、衰者も、須臾にして必滅することだけは確実だろう。

ことを男女の愛という一事に限るならば、その愛がいったい何だろう。紛わしくもつれよってゆく、他愛もない行きずりの快不快ではないか。仕組まれたワナに、仕組まれたように落ちていって、さて、愛の、裏切りのと喚いたって、何になろう。盲亀と盲亀が、波の反転の中で、危くたぐりよっているようなものである。かりに一人の男性が、断乎として一人の女性を夢みたとしても、アナタハンに投げ出されれば、アナタハンの男女のようにならなければ、仕合せだ。

私たちは、きわめて偶然の集積から、目前刻下、世界の一隅に生きている。たとえば私は、ニューヨークの一隅から、追いだされるようにして、ロンドンの霧の中に降りてきた。さもしたりげに、菅野もと子まで同伴しながらだ。いや、ウイスキーを手にしながら、彼女のバスあがりの暖い肌をひそかに待っていない、とは云いきれまい。

そのくせ、右の手にボール・ペンを握りしめながら、矢島恵子宛に、とりとめない嫉妬の書状

を書き続けているのはまったく狂気の沙汰を通り越していた。

一月二十七日、ニューヨークを出発、ジェット豪奢版で、六時間半、今しがた夜霧のロンドンに着きました。そのロンドンの旅宿の窓から、ヒタヒタと押し寄せてくる霧を眺めやりながら、ウイスキーを片手に、この手紙を書いております。こんな霧を、生れて初めて実感致しました。霧とは思えない。何か、無限の奈落が、ガラス戸の間際まで攻め寄せて来ている心地です。

さて、その霧をみつめながら、少しく正直に（バカがつくやもしれず）さしかかった問題に触れますが、もし事実とすれば、つとめてあなたが忘れようとしていることを、故意にあばくことになるかもわかりません。ただ、私の率直の不安を、率直に申し述べて、正確な対処の方法を講じたいと思うのです。

実は、あなたと事を起してから間もなく、（多分、年の暮間近でしょう）あなたは或る人の思われびとだから、いさぎよく手をひいた方がいいのではないか、という風な忠告を受けました。いや、ある種の危険すら伴うのではないか、とその人の話はきわめて漠然としていて、私はそんなくだらないことは意にも介しないつもりでおりました。しかし、Qホテルの中にある天ぷら屋から、一人の男に呼び出された時には、どういうわけか、しきりに怯えたことを、ひょっとしたらあなたも記憶しているかもわかりません。もっとも、これはまったく関係のないことでした。その後、私が浅草で、一二度、電話に怯えたことを、覚えておりますか。これもまた、何の関係もない悪戯の電話であったに相違ありませんが、私はその恐怖を、浅草のヤクザの話に置きかえて、多分、それとなく、あなたに語ったでしょう。

しかし、正直な話、私は一生など、大したものだとは思っておりません。もし、殺されるなら、またやむをえないことだとも思っておりました。第一、そんなバカなことが起りうるか、あてになる話でも何でもなく、思いがけない出来事にあえば怯えたことは事実ですが、実のところ、それ程気に留めておりませんでした。しかし、あなたが、仙台で、やれ劇場に差入れがあったの、やれみんな一等の切符を買ってもらったの、やれこれがその時の写真だのと語っていた時には、いささかキモを潰したものでした。

その後、私はS氏に直接会い、私は私なりに甚だ愉快を感じたと申せましょう。何の意趣も、また何の危懼も感じなくなったことを、正直に申し上げられると信じます。

ところで、出発の当日、しかもその間際、ある友人から、また、私は忠告を受けたのです。S氏は決してそんな意思はなかろうが、その乾分は、私を殺す、と云っているというのです。S氏があなたを、ナオミ（潤一郎の痴人の愛？）のように愛している矢先、私が横取りをした……、これではどんなことだって起りうる、という話でした。この友人の話が事実であり、この頃出た話だとするならば、厭がらせとして、既に時期を失しているでしょう。どだいそんなバカげたことはない筈です。そんなバカげたことはないと、何度考えてみても、しかし、先方の（つまり乾分の）真意がわかりません。同時に、私の不安も消せなくなってまいりました。

こういう問題を、殊更、妄想に足をとられやすい旅先で考えたり、手紙に認めたりするというのは、適当ではありません。誤解が誤解を生み、物事は錯綜するばかりでしょう。それにもかかわらず、私は日に一度ずつは、その対処しようのない幻影に怯えるのです。バカバカしく、とりとめないことだといくら自分に云い聞かせてみても、相手の真意がわかりにくいことへの

妄想は、次第に増大するばかりで、留まることがないのです。まるで、目の前に押しよせているこのロンドンの霧のあんばいに、私の脳髄の中に広がっていくばかりです。

私ははじめ、S氏をよく知っているK氏や、Y氏あたりに手紙して、いったいそういうことがありうるかということを確かめようか、と考えたこともありました。しかし、問題は、S氏にあるのではなくて、おそらくはS氏の真意をとりちがえている第三者にあるわけで、その第三者の意思を知るなどということは、到底出来得ないことだと知りました。いや、その第三者の意思を、曲りなりにも、私が出発の当日に某君が語ってくれたわけでしょう。

私は智者でも、勇者でもない、一介の文士です。こんなとりとめないことを、ロンドンの旅舎で書き続けているというのも、つまりは、私のおろかな惑乱からに相違ありません。ですから、この手紙を読んだからといって、かりにあなたが、先方に会う……、嘆願する……。万が一にも、そのようなことは、やめて頂きます。

あなたは静寂……、なにも微動だもしない方がいいかと思います。私もこの旅の終りまでには、くだらない人事のことは、ことごとく放下して、自分の仕事に没頭のつもりです。

新年の御清福を祈ります。

書いていくうちに、自分の中に奇妙な現実感を煽りあげ、その揚句、恵子の肉感をたぐりよせるのは、この日頃、転々と移り歩く旅先の宿の日課である。それにしては、女々しい出来の手紙であった。よし、思いきった怪文書に作り変えてみようか、と新しいウイスキーを飲みかけた時に、電話のベルが鳴り、

「ハロウ、ハロウ」

の声である。勿論のこと、もと子からのようだ。
「ねえ、どうする？　今、K子さん、バスなのよ」
「どうするって、そっちへウイスキーを持って行って、飲んでもいいの？」
「駄目よ、そんなこと……」
「じゃ、入れ替ってもらえるの？」
「……バカ、そんなこと、頼めるものですか」
「じゃ、あんたがここへ忍びこんでくる以外に、手がないじゃないですか」
「いいかしら？」
「どうか知らない」
「意地悪……。でも、行けたら、行ってみるわね。今、何してるところ？」
「恋文だよ、恋文。いや、嫉妬の手紙かな。飲みながら、それを書いていたところ」
ガチャンと電話が切れた。私があわてて、書きさしの手紙を鞄の中にねじこむと、ほとんど間髪を入れず、ノックもなしに、彼女が走りこんできて、そのまま大仰な接吻になった。私は開いたままのカーテンの間から、窓ガラスのまぎわまで襲来している白濁の霧の渦を見るのである。
「おバカさん。いったい、どこを見ているの？」
「霧だよ、霧」
「接吻している時ぐらい、まともに相手の顔を見るものよ」
そういえば、恵子からも、何度かそんなことを云われたような記憶がある。私は素直に、もと子の方に向き直って、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com